

# スペイン・ガリシア地方出身者が話す カスティーリャ語談話展開分析の試み

田中 香織

## はじめに

本研究では、スペイン語における談話展開の方法を明らかにしていくための前段階として、ガリシア地方出身者が話すカスティーリャ語<sup>(注1)</sup>の談話展開の方法を分析することとする。

### 1. 談話展開の方法とは — 先行研究の概念 —

談話とは文より大きい言語単位で、あるまとまりをもって展開した文の集合のことを言い、話されたもの、書かれたものの両方を含む。言語学においては様々な研究分野があり、談話に関する研究も数多く見受けられる。しかしながら、談話展開の方法となるとその数は少なく、これから研究が進んでいく分野であると言えることができる。

談話展開に関する先行研究として、日本においては東京方言の談話展開の方法を解明し、関西方言との対照によって談話展開の方法に地域性があることを認めた久木田恵(1990)がある。久木田はその研究資料として説明文を用いているが、説明文には一貫したテーマがあり、資料も得易いという利点があるためである。久木田が分析、考察した結果、東京方言と関西方言とではその談話展開の方法に明らかな違いが認められた。すなわち、東京方言においては「話し手が自己の主張を露にして聞き手を納得させる方向に展開する」という方法、すなわち「主観直情型」をとるのに対し、関西方言では「順接の接続詞によってひたすら状況を詳しく説明して聞かせる」という展開方法である「客観説明累加型」をとるということを指摘している。そして前者を「東京型」、後者を「関西型」とし、地域性を認めた。

また、英語圏においては「英語における談話展開の方法」を明らかにしているものは数が少ない上に本研究とは内容に大きなズレがあると思われるため、本研究では社会言語学的談話分析として泉子・K・メイナード(1997)で挙げられている Labov and Waletzkey (1967) 及び Labov (1972) の研究を参照していく。

Labov は Labov and Waletzkey (1967) 及び Labov (1972) の中で個人的経験物語 (personal narrative) について研究している。Labov は、ニューヨークに住む若者たちを対象にインタビューを行ない、録音、文字化したものを資料としている。Labov and Waletzkey が分析、考察した結果、個人的経験物語は、「Abstract (要旨)」、「Orientation (設定)」、「Complicating action (出来事)」、「Evaluation (評価)」、「Result or resolution (結果)」、「

Coda (結語、しめくくりの言葉)」の6つの要素で構成されていることを指摘した。その中でも「Evaluation (評価)」は、個人的経験物語を語る上で欠くことのできない最も重要な要素であるとしている。そして「Evaluation (評価)」には2つのパターン、「物語の外枠で付け加えるもの」と「物語に内包されたもの」とがあることを認めている。

## 2. 目 的

「Labov and Waletzkey (1967) は個人的経験物語は次のような要素で構成されていると説明する。」(泉子・K・メイナード 36)

- 要旨 (Abstract) : 何の話か
- 設定 (Orientation) : 誰がどこでいつ何をしたか
- 出来事 (Complicating action) : 起きた事件は何か
- 評価 (Evaluation) : 話し手の気持ちはどうだったか、話の意味は何か
- 結果 (Result or resolution) : 結局どうなったか
- 結語、しめくくりの言葉 (Coda)

このように、個人的経験物語は6つの要素で構成されていると考えられていて、その中で最も重要かつ必須要項であるとされているのが、話し手がなぜその話をその場でする必要があると思うのかを説明する部分、すなわち「評価」であるとしている。「評価」には「物語の外枠で付け加えるもの」と「物語に内包されたもの」とがあることが認められている。これは、久木田恵(1990)が談話展開のパターンに認めた、話者の主観を露に述べ聞き手を納得させていく展開方法である「主観直情型」と順接の接続詞によって客観説明を積みかけるように累加して述べていく展開方法である「客観説明累加型」に共通するのではないかと考える。

これらの展開方法がスペイン語談話においても認められるか否かという問題は、対照言語学の研究として大変興味深いものであり、従って、日・米2つの先行研究に基づき、カステーリャ語の談話展開の方法を明らかにしていくことを本研究の目的とする。

## 3. 方 法

現在、日本に住んでいるスペイン人に協力を依頼し、筆者自身が録音、文字化したものを久木田(1990)及び Labov and Waletzkey (1967)における方法に基づき、文頭・文中・文末で使用されているキーワードとなる語を抜き出し、談話の一文一文に対して大まかな内容を検討し、それを分析表として示す。そして、その結果から[分析表1]では久木田(1990)が明らかにした「主観直情型(東京型)」と「客観説明累加型(関西型)」との対照を通して類型化を試みるとともに、[分析表2]では Labov and Waletzkey (1967) が明らかにした「物語の外枠で付け加えるもの」と「物語に内包されたもの」との対照、考察、類型化を試みる。

## 4. 資料について

談話資料には、スペイン・ガリシア地方出身のスペイン人が話すカスティーリャ語を筆者自身が録音、文字化したものを用いることとする。

- 4-1. 録音日：2002年10月16日(水)
- 4-2. 話者：女性 25歳 スペイン生 在日2ヶ月(現在、横浜市在住)
- 4-3. 録音実施地：筆者自宅(神奈川県横浜市)
- 4-4. 録音形式：談話形式
- 4-5. 話者の住居歴等
  - 0歳～18歳：スペイン／ガリシア地方／ラ・コルーニャ
  - 18歳～21歳：スペイン／ガリシア地方／  
サンティアゴ・デ・コンポステーラ
  - 21歳～25歳：イギリス／ケンブリッジ  
(2001年1月～8月：サンティアゴ・デ・コンポステーラ)
- 4-6. 話者の両親の出身地
  - 父：スペイン／ガリシア地方／ラ・コルーニャ
  - 母：スペイン／ガリシア地方／ラ・コルーニャ

## 5. 談話展開の分析

### 5-1. 資料1『Sobre La Coruña』(ラ・コルーニャについて)

[資料1]

- 01. Pues La Coruña está en Galicia.
- 02. Y está al lado de la playa.
- 03. Y es un, es un puerto bastante grande.
- 04. Es un puerto industrial donde vienen muchos barcos, pesqueros
- 05. y hay un mercado muy grande de pescado como el que hay en Tokio
- 06. donde se hacen ( ) la lonja
- 07. que es en donde va la gente de las tiendas a comprar pescado.
- 08. Y ( ) luego también hay
- 09. ( ) es muy verde, hay muchos arboles,
- 10. ( ) muchos,
- 11. bueno no parques pero bosques, muchos bosques.
- 12. Y ( ) no sé que más ...
- 13. ( ) Sobre todo las playas, las playas son muy bonitas.
- 14. Y aunque no hace tan buen tiempo como en el sur, como por Andalucía y por ahí,

15. ( ) lo bueno que tienen es que no hay mucha gente.  
 16. Y puedes ir a la playa y no encontrarte con mucha gente.  
 17. Por ejemplo, si sabes donde hay playas que este bien, coges el coche conduces  
 18. y puedes llegar a una playa y estar tu sólo con tus amigos .  
 19. Lo que es muy difícil si vives en el sur.  
 20. Luego otra cosa de Galicia,  
 21. ( ) hay mucha marcha por la noche  
 < \*mar...? >  
 22. Marcha, la gente se va de copas, a los bares  
 23. ( ) o a las discotecas  
 24. ( ) y sobre todo la gente se va de copas  
 25. ( ) alrededor, cerca de la playa es por donde están todos los bares  
 26. Y ( ) no sé.  
 27. Hace muy mal tiempo, llueve mucho, mucho, mucho,  
 28. hace frío  
 29. pero cuando hace buen tiempo vale la pena.

※( )は「あー」「えー」「うーん」等、言い淀みと思われる箇所

※< \*mar...? >は聞き手(筆者)による確認箇所

## 5-2. 分析表

[分析表1]

	内 容	文頭 1	文頭 2	文 中	文 末
01	導入／所在説明	Pues			
02	所在説明	Y			
03	場景説明①	Y			
04	場景説明付加				
05	場景説明②	Y	como		
06	場景説明②´				
07	場景説明付加				
08	話題付加暗示	Y			
09	場景説明③				
10	場景説明付加				
11	場景説明④	bueno		pero	
12	話題轉換暗示	Y			
13	状況説明①				
14	状況推測説明①	Y	como / como		
15	状況推測付加＋理由説明			es que	

16	状況推測説明②	Y			
17	例示①		Por ejemplo		
18	例示①´				
19	小結(所感を交えて)				
20	話題転換暗示	Luego			
21	状況説明②				
22	22. に対する説明付加				
23	状況説明付加				
24	状況説明③	Y			
25	状況説明付加				
26	話題転換暗示	Y			
27	気候説明				
28	気候説明付加				
29	結び(所感を交えて)	pero			

資料1『Sobre La Coruña』(ラ・コルーニャについて)では、[分析表1]から分かるように、キーワードとなる接続詞「y」が9回、「pero」が1回の計10回文頭において見ることが出来る。

「y」の意味<sup>(1,2)</sup>としては、日本語の「それで」「そして」類に相当するものであると考えられるが、辞書によれば、時間的前後関係を表す「そして」「それから」、結果を表す「それで」「従って」、逆接を表す「しかし」、付加を表す「しかも」「それどころか」、話題を転換する「では」「それで」「ところで」など細かく分けられている。久木田(1990)においては「それで」「そして」類を順接の接続詞としているが、ここから一概に順接の接続詞とすることは出来ないことが伺える。

しかしながら、この談話においては逆接的な用法は見取れなかったため、順接の接続詞に類型しても問題はないのではないかと考える。従って、順接の接続詞を頻繁に用い客観説明を積みかけるようにひたすら累加していくという「客観説明累加型」に類型化することができるのではないかと考える。

「pero」に関しては、英語の「but」に相当するもので、日本語では「しかし」「だが」「とはいえ」という意味に相当する。口語では「ねえ」「でも」「それにしても」という意味になるが、本研究は意味(訳)に言及するものではないため、機能のみを見てみると、「pero」が文頭で用いられているのは29のみで、談話をしめくくるために用いられていることが分かる。27.~29.を訳してみると、「天気がとても悪く、(雨がたくさん降り、寒い)とはいえ、天気が良ければ行く価値はある」(筆者訳)となり、ここからもわかるように27.の「Hace muy mal tiempo, …」を逆接の接続詞「pero」によって反対の事柄「cunado hace buen tiempo」を述べ、さらには「vale la pena」で全体をもまとめるインパクトを与えていると言うことが出来る。

「y」「pero」以外にキーワードとして取り挙げたものに関しては、[分析表2]で言及することとする。

「y」及び「pero」に関しては、[分析表1]で考察したため、ここではそれ以外のキーワード

〔分析表 2〕

	要素	内容	文頭	文中	文末
01	導入 (introduction)		Pues		
02	紹介 (presentation)	物事の伝達	Y		
03			Y		
04					
05			Y / como		
06					
07					
08	転換 (設定) (change)	方向付け	Y		
09					
10					
11			Bueno / pero		
12	転換 (設定)	方向付け	Y		
13	導入		Sobre *		
14			Y / como / como		
15	根拠 (reason)			es que	
16	(評価) (evaluation)	話の意味	Y		
17	例示 (評価) (illustration)	話の意味	Por ejemplo		
18	例示 (評価)	話の意味			
19	結語 (評価)				
20	転換 (設定) / 導入	方向付け	Luego		
21					
22					
23					
24			Y / sobre		
25					
26	転換 (設定)	方向付け	Y		
27					
28					
29	結語 (coda)	しめくくりの言葉	Pero		

※ “\*”は〔分析表 1〕では取り上げなかったキーワード

をもとに分析を試みる。

「y」及び「pero」以外では、「pues」「como」「luego」「bueno」「sobre」「es que」「por ejemplo」をキーワードとして取り上げることとする。これらの内、「pues」以外は接続詞ではなく、品詞もそれぞれ異なるが、談話標識になる語であると言うことができる。大倉美和子(1997)「Ⅱ概観 スペイン語の談話研究」『日本語とスペイン語』290においても、「pues」「luego」「bueno」「por ejemplo」などは Fuentes Rodríguez (1996a) で用いられた談話標識として取り上げられている。「como」「sobre」「es que」に関しての記述はないが、「como」には「～のような」「例えば」という意味があり、「por ejemplo」に近いものであると言うことができるし、「sobre」は主題、関係を表して、「～について」「～に関して」という意味があり、「es que」には「実は～である」などのように理由を表す意味があるところから、談話展開に必要な標識であると考えられる。つまり、「como」は「por ejemplo」と同じ「言い換え、訂正などコミュニケーション・ストラテジー型」に、「sobre」は「発話導入型」に、「es que」は「理由提示型」もしくは「終結型」<sup>(43)</sup>に類型することができるのではないかと考える。

以上の理由から、これらさまざまなキーワードを用いて客観説明を積みかけるようにひたすら累加していくという展開方法をとっていることが伺える。

## 6. 結 論

以上、分析の結果、以下のことが明らかになった。

本研究では、日・米2つの先行研究に基づき、スペイン語(カスティーリャ語)における談話展開の方法の分析を試みたが、その結果、資料1に関してはLabov and Waletzkey (1967)の方法で分析することができないことが明らかになった。その理由として、Labov and Waletzkey (1967)の研究においては、談話資料として個人的経験物語を用いているが、本研究の資料は客観的事実を述べた説明文であったため、6つの要素では分類することができず、この方法が適用できなかったと考える。

また先行研究として取り挙げた久木田(1990)及びLabov and Waletzkey (1967)の研究においては、談話全体を通して分析を行なっていると言うことができるが、「資料1」においては、主テーマである『Sobre La Coruña』の中に、6つの小さなテーマ①「港について」②「市場について」③「自然(緑)について」④「海岸について」⑤「ナイトライフについて」⑥「気候について」があることが分かった。このため、従来の分析方法での分析では不十分であると考えられる。

そこで新たな要素(導入、紹介、転換、根拠等)を取り入れ、6つの小さなテーマごとに区切り分析を行なった結果、出身地について語るという客観的事実を説明した談話においても19.「Lo que es muy difícil si vives en el sur.」や29.「pero cuando hace buen tiempo vale la pena.」のように結びの部分で所感を交えた主観的表現を見出すことができた。

談話中に主観的表現を用いるのではなく、結び部分で主観的表現を用いるという特徴は、やはり「客観説明累加型」の特徴であると言うことができ、19.に関しては談話全体を通して見

れば文中ということになるが、小さなテーマごとに分けた場合は④「海岸について」の結び部分となるため、Labov and Waletzkey (1967)の方法に類型化するなら「物語に内包されたもの」と言うことができ、また久木田(1990)の方法に類型化するなら「客観説明累加型」と言うことが出来る。

## 7. おわりに

本研究は、久木田(1990)及びLabov and Waletzkey (1967)における方法を用いて日本語及び英語以外の言語であるスペイン語の談話展開の方法を分析するという初めての試みである。

従って、この資料のみからスペイン語における談話展開方法の結果を導き出すことは出来ないが、この試みによって、久木田(1990)の言う「客観説明累加型」とLabov and Waletzkey (1967)の言う「物語に内包されたもの」との間に共通性を見出すことが出来たことは注目に値するのではないかと考える。

本研究で用いた資料及び結果が、今後、スペイン語談話展開分析を行なう上での資料として参考になれば幸いである。

## 付 記

本研究を行なうにあたって、アンケート用紙(話者の住居等の質問紙)及び談話資料の native checkについては、スペイン語 native 話者でいらっしゃるフェリス女学院大学国際交流学部助教授ヒガ・マルセーロ先生に御教示賜った。記して御礼申し上げます。

## 〔日本語参考文献〕

加藤重広(2001)「照応現象としてみた逆接」『富山大学人文学部紀要』34

久木田恵(1990)「東京方言の談話展開の方法」『国語学』 162

国立国語研究所(1997)「Ⅱ概観 スペイン語の談話研究」『日本語とスペイン語(2)』 290-291 くろしお出版

齋藤孝滋編(1999)『地域言語調査研究法』 おうふう

佐久間まゆみ(1997)『文章・談話のしくみ』 おうふう

須崎由嘉(1999)「東西方言折衝地における談話展開の社会言語学的研究」『日本語学会 第198回大会予稿集』

泉子・K・メイナード(1993)『会話分析』くろしお出版

泉子・K・メイナード(1997)『談話分析の可能性』34-44 くろしお出版

園部美由紀(1997)「豊橋方言における談話展開の方法」『名古屋・方言研究会 会報14号』

田中香織(2002)「英語における談話展開の方法—日本語における談話展開の方法との比較」『日本言語学会 第124回大会予稿集』

野崎希世江(1996)「江戸語における談話展開の特徴」『名古屋・方言研究会 会報13号』



橋内 武(1999)『ディスコース』 くろしお出版

畑中宏美(1994)「富山県氷見方言の談話展開の方法」『北海道方言研究会二十周年記念論文集 ことばの世界』

〔英語参考文献〕

Labov, William and Joshua Waletzky (1967)

Narrative analysis: Oral versions of personal experience

Essays on the Visual and Verbal Arts 12-44

University of Washington Press

Labov, William (1972) Language in the Inner City

Philadelphia: University of Pennsylvania Press

Schiffrin, Deborah (1987) Discourse Markers

Cambridge: Cambridge University Press

(注1) カスティーリャ語とはスペインの公用語の一つで、標準スペイン語と呼ばれるものである。1978年にカタルーニャ語、ガリシア語、バスク語が公用語として認められたため、厳密に区別する場合に用いられる。本研究において、話者がガリシア地方出身であるため、ガリシア語ではなく、カスティーリャ語であることを明確に示した。

(注2) 語と語をつなぐ機能については、本研究の意図とはズレがあるため省略することとする。

(注3) 理由提示は、談話の最後に発話される可能性もあるため、「もしくは「終結型」とした。

(本学博士前期課程)